

NEW JAPAN
P HILHARMONIE
SUMIDA, TOKYO

新日本フィルハーモニー交響楽団
2024/2025シーズン

9

September, 2024



YUUKA SAITO



JOE HISAISHI

2024/2025 シーズン
新日本フィルハーモニー交響楽団 9月演奏会

Contents

トリフォニーホール・シリーズ/サントリーホール・シリーズ #658 石川亮子	1
すみだクラシックへの扉 #25 小室敬幸	7
楽員ストーリーズ ④③ 廣田真理衣 (第1 ヴァイオリン)	13
NJP from Inside	14
2024 / 2025 シーズン 定期演奏会プログラム	18
NJP 10月、11月公演 柴田克彦の鑑賞ポイント	20
お客様からの声	23
室内楽シリーズ	24
「パトネージュ・システム」のご案内	34

■特別支援企業

オリックス

in 鹿島

CCC

大和証券

東京東信用金庫

NOMURA

フジサンケイグループ

三井住友銀行

■特別支援団体

公益財団法人 オリックス宮内財団

特別支援企業/団体は、新日本フィルの運営を支援しています。

Triphony Hall Series
Suntory Hall Series
2024-2025 Season
#658

9.21 [土]
トリフォニーホール・シリーズ

新日本フィルハーモニー交響楽団
トリフォニーホール・シリーズ 第658回定期演奏会
2024年9月21日(土) 14時00分
すみだトリフォニーホール

9.22 [日]
サントリーホール・シリーズ

新日本フィルハーモニー交響楽団
サントリーホール・シリーズ 第658回定期演奏会
2024年9月22日(日) 14時00分
サントリーホール

<指揮者によるプレトーク>

約5分

●ハイドン (1732-1809)

交響曲第6番 二長調 Hob. I : 6 「朝」

約20分

Joseph Haydn: Symphony No. 6 in D major, Hob. I: 6, "Le matin"

- I. Adagio - Allegro
- II. Adagio - Andante - Adagio
- III. Menuet
- IV. Finale: Allegro

—— 休憩20分 ——

●ブルックナー (1824-96)

交響曲第7番 ホ長調 WAB 107 (ノヴァーク版)

約70分

Anton Bruckner: Symphony No. 7 in E major, WAB 107 (Leopold Nowak)

- I. アレグロ・モデラート Allegro moderato
- II. アダージェヨ : きわめて厳かに、そして非常にゆっくりと Adagio: Sehr feierlich und sehr langsam
- III. スケルツォ : 非常に速く Scherzo: Sehr schnell
- IV. フィナーレ : 動きをもって、しかし速くなく Finale: Bewegt, doch nicht schnell

[指揮] 佐渡 裕

Yutaka Sado, Conductor

[コンサートマスター] 西江辰郎

Tatsuo Nishie, Concertmaster

[アシスタント・コンサートマスター] 立上 舞

Mai Tategami, Assistant Concertmaster

■主催：公益財団法人 新日本フィルハーモニー交響楽団

■共催：すみだトリフォニーホール [9/21 公演]

■特別協賛：オリックス株式会社/公益財団法人オリックス宮内財団

■助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(公演創造活動))

独立行政法人 日本芸術文化振興会

アラーム付時計、携帯電話等をお持ちのお客様は、演奏中に鳴らないようお確かめください。
演奏途中でのご入場、場内での録音および撮影はかたくお断りいたします。

delete  新日本フィルハーモニー交響楽団は、
#deleteC大作戦の啓発パートナーです。

本プログラム冊子は、「deleteC」(みんなの力で、がんを治せる病気にするプロジェクト)に賛同し、新日本フィルのロゴの「C」を消す表現をしております。

「deleteC」については、P. 27をご覧ください。

<コンサートの感想をお寄せください>

演奏会終了後1週間以内にご回答いただいた方の中から、抽選で10名様に新日本フィルよりグッズをプレゼント!

QRコードを読み込み、WEBにてお答えください。
プレゼントの当選者にはメールにてご連絡させていただきます。



@njp.or.jpからのメールが受信できるようご設定をお願いいたします。

<https://forms.gle/pgWSTF1gooyVLG9t8>

いただいたお声は次号以降の定期演奏会プログラムでご紹介させていただく可能性がございます。ご了承ください。

演奏会アンケートは
こちらから
<https://forms.gle/pgWSTF1gooyVLG9t8>



オリックス株式会社
公益財団法人 オリックス宮内財団





©Takashi Iijima

佐渡 裕 [指揮] Yutaka Sado, Conductor

京都市立芸術大学卒業。故レナード・バーンスタイン、小澤征爾らに師事。1989年ブザンソン指揮者コンクール優勝。1995年第1回レナード・バーンスタイン・エルサレム国際指揮者コンクール優勝。

これまでパリ管弦楽団、ベルリン・ドイツ交響楽団、ケルンWDR交響楽団、バイエルン国立歌劇場管弦楽団、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団など、欧州の一流オーケストラに多数客演を重ねている。2015年9月より、オーストリアを代表し110年以上の歴史を持つトーンクンストラ管弦楽団音楽監督に就任し、欧州の拠点をウィーンに置いて活動している。

国内では兵庫県立芸術文化センター芸術監督、シエナ・ウィンド・オーケストラの首席指揮者を務める。

CD録音は多数あり、最新盤はトーンクンストラ管弦楽団を指揮した20枚目のCD『マーラー：交響曲第1番』を2024年5月にリリース。著書に『僕はいかにして指揮者になったのか』（新潮文庫）、『棒を振る人生～指揮者は時間を彫刻する～』（PHP文庫／新書）など。

出光音楽賞(1991年)、モンブラン国際文化賞(2003年)、渡邊暁雄音楽基金音楽賞(2003年)、岩谷時子賞(2014年)、文部科学大臣表彰(2024年)などの受賞歴がある。

2023年4月より新日本フィルハーモニー交響楽団第5代音楽監督に就任。

オフィシャルファンサイト：
<http://yutaka-sado.meetsfan.jp>

倍速視聴は当たり前！ イントロは飛ばす！ サビだけ聴きたい！ ポピュラーの世界では当たり前ともなりつつある、タイパ(タイムパフォーマンス)重視の若者世代を中心とする音楽の聴き方。その意味で言えば、クラシック音楽はタイパが悪い。まずもって1曲が長い。そして生意気盛りの中学生だった頃、ベートーヴェンのピアノ・ソナタを弾きながら思っていた。第2楽章はきれいいじゃん。だったら全部、そういう音楽にしてくれればよいのに――。

クラシック音楽には、かたちがある。交響曲(ピアノ・ソナタもまた同じく)は、急・緩・メヌエット(あるいはスケルツォ)・急の4楽章で構成される。第1楽章はソナタ形式、第2楽章は歌うように、第3楽章は舞曲的な3拍子で、第4楽章は華やかに締めくくること――。交響曲はフルコースの料理のように、性格の異なる4つの楽章が時間の流れに乗せて並べられることで、ひとつの世界を作り出していく。そう、タイパは度外視！ 音楽は時間芸術なのだから、瞬間を移ろい、変わり続ける音の景色をじっくり味わうべしである。

■ ハイドン：交響曲第6番 二長調 Hob. I:6「朝」

古典派において、ホーポーケン番号に従えば108曲の交響曲を書き、「交響曲の父」と称されるヨーゼフ・ハイドン(1732~1809)。その交響曲の創作期間は、モーツァルトの生涯(1756~91)とほぼ同じくらい、つまり著名なハイドン学者であったランドンによれば、1757年頃から1795年にまで及ぶ。「朝・昼・夕」の標題が付いた第6、第7、第8番の交響曲は、1761年、ハイドンが副楽長として、オーストリアのハンガリー国境付近に居を構えるエステルハージ侯爵家に仕えて、最初に作曲されたと推察される。当時、侯爵家の楽団員は15人ほどではあったものの、コンサートマスターのトマジニーを筆頭に、すぐれた奏者たちが集められていた。それは副楽長時代のハイドン(1761~65年)が約25曲の交響曲を手がけ、その約半数が協奏曲(より厳密に言えば、フランスのサンフォニー・コンセルタンテ、もしくはオーストリアや北イタリアのコンチェルトーネ)風であることにも反映されている。

ところで、一日の時刻を標題とするというアイデアは、パウル・アントン侯から与えられたと伝えられる。古代ギリシア以来、世界は火・気・水・土の四大元素からなると考えるヨーロッパ。であるならば、朝・昼・夕・夜の四部作ではなかったか、つまり「夜」は消失したのではないかという説も根強くある。

第1楽章は、序奏において穏やかな日の出を表現して開始される。快活な主部はソナタ形式により、第1主題の前半はフルート、後半はオーボエ2本

▶ エステルハージ宮のために書いた最初の交響曲

▶ 音楽の特徴と聴きどころ

で奏されて朝の気分を盛り上げる。第2楽章は弦楽器のみの緩徐楽章。緩・急・緩のフランス風序曲の構成によって、独奏ヴァイオリンと独奏チェロが優雅な対話を繰り広げる。第3楽章のメヌエット楽章では、中間のトリオにおける独奏ファゴット、独奏ヴィオローネ(コントラバス)、および独奏ヴィオラと独奏チェロの活躍がめざましい。第4楽章はソナタ形式によるフィナーレ。冒頭のフルートに始まり、展開部の重音を駆使する独奏ヴァイオリン、再現部のホルン2本の速いパッセージ等、各楽器に見せ場が用意されている。

[楽器編成]フルート、オーボエ2、ファゴット、ホルン2、チェンバロ、弦楽5部。

■ ブルックナー：交響曲第7番 ホ長調 WAB 107 (ノヴァーク版)

名声を決定的に ▶ 「ベートーヴェンが亡くなって以降、最も重要なオーケストラ作品」。アントン・ブルックナー(1824~96)の交響曲第7番をこう評したのは、パイロイトにおけるワーグナーの「パルジファル」初演を指揮し、第7番のミュンヘン初演を大成功へと導いた、バイエルン王国の宮廷楽長ヘルマン・レーヴィであった。オーストリアのリンツ近郊に生まれ、教会オルガニスト、また音楽理論の講師として、ザンクト・フローリアン、リンツ、ウィーンと着実にキャリアを築き上げていったブルックナー。その作曲家としての創作は、ワーグナーの楽劇やリストの交響詩が世の中の注目を集めた当時において、ミサ曲等の宗教的声楽作品と交響曲という、きわめて伝統的なジャンルに集中している。そのなかで交響曲第7番と、さらに同時期に書き進められた《テ・デウム》によって、ブルックナーは60歳を超えてから、作曲家としての名声を決定的なものにしたのだった。

作曲の経緯と調の選択 ▶ 番号付けされたブルックナーの9曲の交響曲のうち、第7番において唯一、ホ長調というベートーヴェンの交響曲にはない調が選択されているのは、ブルックナーの強い意欲の表われと言えるだろう。4つの楽章は、ホ長調、嬰ハ短調、イ短調と3度ずつ下がっていき、第4楽章でホ長調へと戻る。作曲は第6番の完成からほどなく、1881年9月23日から開始され、まず1882年10月16日に第3楽章が、同年12月29日に第1楽章が書き上げられた。翌1883年4月21日に第2楽章が完成。そして第4楽章の最後の推敲が、「ザンクト・フローリアン、1883年9月5日」の書き込みとともに終えられている。

ワーグナー・チューバの導入 ▶ この成立順は、1883年に完成された第2、第4楽章のなかに、ワーグナー・チューバが導入されていることに関係すると考えられる。1863年、

「タンホイザー」のリンツ初演を契機としてワーグナーに開眼したブルックナーは、ワーグナーを師と仰ぎ、1882年7月26日の「パルジファル」初演に際してもパイロイトを訪れた。そして第2楽章がワーグナーの死を予感しながら書き進められるなか、1883年2月13日ワーグナーが死去。翌日、訃報を受け取ったブルックナーは、その場に泣き崩れたという。こうして第7番以降、ワーグナーが「ニーベルングの指環」のために考案した、ワーグナー・チューバ(低音のホルンの音色を求めたもので、主にホルン奏者が演奏する)の荘重な響きは、ワーグナーへのオマージュとして、ブルックナーの後期の交響曲における特徴のひとつとなっていく。

ブルックナーの交響曲でしばしば話題になると言えば、作曲者の改訂による複数の稿が存在し、さらに校訂者による複数の版が存在することであろう。一方、第7番は珍しく、大幅な改訂は行われていないものの、完成以降も若干の手直しが施されており、その変更をどう捉えるかによって、初版、ハース版、ノヴァーク版の3つの版が存在している(本日の演奏はノヴァーク版による)。

曲の構成と音楽の特徴 ▶

第1楽章はシューベルトの「未完成」と同じ歌謡的、すなわち美しく抒情的な楽章として全曲の幕を開ける。ソナタ形式によるが、ブルックナーに典型的な書法である第3主題まで登場し、コーダでは、31小節にわたる主音(ミの音)保続の上で第1主題が高らかに歌い上げられる。

第2楽章は重々しい短調の第1主題と、天上の明るさのような長調の第2主題という、2つの音楽を行き来して進む。3度目の第1主題が圧倒的な頂点に達した後、第184小節から(スコアの練習番号X)、ワーグナー・チューバ4本とチューバによる葬送のコラールが静かに鳴り響き、最後は魂の平安を祈るように長三和音の響きへと溶け合わされる。

第3楽章は野性味と活気にあふれたスケルツォ楽章。へ長調に転じる中間のトリオは、オーストリアの穏やかな緑の田園風景を思わせる。

第4楽章はソナタ形式による。やはり第3主題まで用いられるが、再現部では、提示部とは逆に第3、第2、第1主題と再現されるため、形式的なわかりにくさが指摘される楽章でもある。コーダの終わりに、再び主音保続の上に第1楽章の第1主題が輝かしく回想されて全曲を閉じる。

[楽器編成]フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、ワーグナー・チューバ4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、シンバル、トライアングル、弦楽5部。



緑はつづく。想いはつづく。

**GREEN
KAJIMA**

100年をつくる会社
鹿島



「GREEN KAJIMA」の詳細記事はこちら

SUMIDA
TOBIRA of classic
2024-2025 Season
#25

9.27 [金] 28 [土]

すみだクラシックへの扉

新日本フィルハーモニー交響楽団 定期演奏会 すみだクラシックへの扉 第25回
2024年9月27日(金) 14時00分 すみだトリフォニーホール
9月28日(土) 14時00分 すみだトリフォニーホール

●ドヴォルジャーク (1841-1904)

チェロ協奏曲 口短調 op.104 B.191 *

約45分

Antonín Dvořák: Cello Concerto in B minor, op.104, B.191 *

- I. Allegro
- II. Adagio ma non troppo
- III. Finale: Allegro moderato

—— 休憩20分 ——

●ブラームス (1833-97)

交響曲第1番 八短調 op.68

約45分

Johannes Brahms: Symphony No.1 in C minor, op.68

- I. Un poco sostenuto – Allegro
- II. Andante sostenuto
- III. Un poco allegretto e grazioso
- IV. Adagio – Più andante – Allegro non troppo, ma con brio

[指揮] 久石 譲

Joe Hisaishi, Conductor

[チェロ] 宮田 大 *

Dai Miyata, Cello *

[コンサートマスター] 崔(チェ)文洙 / 伝田正秀

Munsu Choi and Masahide Denda, Concertmaster

- 主催：公益財団法人 新日本フィルハーモニー交響楽団
- 共催：すみだトリフォニーホール
- 特別協賛：オリックス株式会社 / 公益財団法人オリックス宮内財団
- 助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(公演創造活動))
独立行政法人 日本芸術文化振興会

アラーム付時計、携帯電話等をお持ちのお客様は、演奏中に鳴らないようお確かめください。
演奏途中でのご入場、場内での録音および撮影はかたくお断りいたします。

演奏会アンケートは
こちらから
<https://forms.gle/pgWSTF1gooyVLG9t8>



オリックス株式会社
公益財団法人 オリックス宮内財団



Profile



©Nick Rutter

久石 譲 [指揮] Joe Hisaishi, Conductor

国立音楽大学在学中よりミニマル・ミュージックに興味を持ち、現代音楽の作曲家として出発。宮崎駿監督作品をはじめ映画音楽を多数手掛け、日本アカデミー賞最優秀音楽賞、紫綬褒章受章など数々の賞に輝く。2023年6月、ドイツ・グラモフォンからリリースされた最初のCD「A Symphonic Celebration」は米国ビルボード2部門で1位を獲得した。04年7月「新日本フィル・ワールド・ドリーム・オーケストラ (W.D.O.)」の音楽監督に就任。17年からは「Joe Hisaishi Symphonic Concert: Music from the Studio Ghibli Films of Hayao Miyazaki」世界ツアーで大成功を収める。近年は「交響曲第2番」や「Metaphysica (交響曲第3番)」などの作品発表にも意欲的。14年より最先端の“現代の音楽”を紹介する「MUSIC FUTURE」を主宰、19年には「FUTURE ORCHESTRA CLASSICS」を開始し、同年リリースの「久石譲 ベートーヴェン：交響曲全集」で第57回レコード・アカデミー賞特別部門特別賞を受賞。

2020年9月より新日本フィルハーモニー交響楽団 Music Partner。21年4月より日本センチュリー交響楽団の首席客演指揮者を兼任、25年4月より同交響楽団の音楽監督に就任予定。24年4月、ロイヤル・フィルハーモニー管弦楽団のComposer-in-Associationに任命される。

宮田 大 [チェロ] Dai Miyata, Cello



2009年ロストロポーヴィチ国際チェロコンクールにおいて、日本人として初めて優勝。これまでに参加した全てのコンクールで優勝を果たしている。その圧倒的な演奏は、作曲家や共演者からの支持が厚く、世界的指揮者・小澤征爾にも絶賛され、日本を代表するチェリストとして国際的な活動を繰り広げている。

スイスのジュネーヴ音楽院卒業、ドイツのクロンベルク・アカデミー修了。

録音活動も活発で、トーマス・ダウスゴー指揮、BBCスコティッシュ交響楽団との共演による『エルガー：チェロ協奏曲』の欧米盤が、欧州のクラシック界における権威のある賞の一つ「OPUS KLASSIK2021」を受賞するなど、海外からの評価も高まっている。

最新アルバムは2024年3月に『吉松隆：チェロ協奏曲《ケンタウルス・ユニット》/ 4つの小さな夢の歌』をリリース。

近年は国際コンクールでの審査員や、ロームミュージックセミナーの講師を務めるなど、若手の育成にも力を入れている。

使用楽器は、上野製菓株式会社より貸与された1698年製A. ストラディヴァリウス“Cholmondeley”である。

Program Notes ●小室敬幸 [音楽ライター]

交響曲第1番 ハ短調 op. 68のフルスコアとピアノ連弾譜の出版に際して、出版社ジムロックはブラームスに“5000ターラー”を支払ったという記録が残っている。これがどれほどの金額かといえば、ブラームスは1887年以降、3部屋あるアパートの家賃として半年で347グルデンと25クロイツァーを支払っていたのだが、当時のレート(1ターラー=3マルク、1グルデン=100クロイツァー=2マルク)で計算してみると、なんと10年分も家賃を稼いだことが分かる。仮に1ヶ月の家賃を現在の15万円としてみた場合、1曲でおおよそ1950万円という換算だ！ちなみに4ヶ月ほどで完成した交響曲第2番にも同じ金額が払われている。(『Brahms in Context』Cambridge University Press 2019など参照)

■ ドヴォルジャーク：チェロ協奏曲 口短調 op. 104 B.191

チェロ協奏曲のお値段 ▶ アントニン・ドヴォルジャーク(1841~1904)もブラームスから紹介されて、ジムロック社から楽譜を出版していた。当初はかなり高い金額しか支払われなかったようだが、ドヴォルジャークは交渉——交響曲第7番(1885年出版)に対して3000マルクを払うというジムロックからの申し出に、倍額を払わないと他社に作品を渡すと最後通告——をおこない、状況を改善していった。

晩年の1896年に出版されたこのチェロ協奏曲についても「テ・デウム」とセットだったとはいえ6000マルクが支払われている。ただ換算してみると2000ターラー(≒780万円)になるので、独身のブラームスよりかなり実入りが悪かったことが分かる。しかもドヴォルジャーク家は子沢山でお金が必要だった。だからこそ給料の良い職場を求めて、プラハ音楽院教授(年俸1200グルデン≒312万円)を離れてまで海を渡り、1892年にニューヨークのナショナル音楽院院長(年俸1万5000ドル≒8000~9000万円)に就任したのだろう。

名作誕生の経緯 ▶ そんな新世界での生活から丸2年ほどたった1894年11月8日から、翌年2月9日にかけて3ヶ月で作曲されたのが本作である。以前から同郷出身のチェロの名手ハヌシュ・ヴィハン(1855~1920)に協奏曲をせがまれていたのだが、チェロの独奏は中音域以外の音色を好んでいなかったため、ドヴォルジャークの筆は進まなかった。ところがナショナル音楽院の教員だったチェリスト・作曲家で、後にオペレッタで成功を収めたことで有名になるヴィクター・ハーバート(1859~1924)によるチェロ協奏曲第2番(1894年3月初演)を2度聴いたことで、ドヴォルジャークは本作を書こう

曲の構成と
音楽の特徴

と思いついたのだという。第1・3楽章にはヴィハンの意見が取り入れられて、一部で独奏パートがより技巧的になった(ドヴォルジャークの書いたオリジナルもOSSIA(代案)として楽譜に併記されている)。ただ第3楽章にカデンツァを入れたいという希望は、頑として聞き入れなかった。

第1楽章 口短調、協奏ソナタ形式。クラリネットが吹き出す物悲しい第1主題が、いわば主人公。登場するたびに雰囲気を変えて、葛藤を繰り返す。対比される第2主題は、静かに優しさをたたえたホルンの音色で最初は現れる。独奏チェロが登場すると、第1主題と第2主題を通して深く感情を吐露。管弦楽によって第1主題が明るく響くと展開部、第2主題が力強く鳴ると再現部へと分け入ってゆく。

第2楽章 ト長調、三部形式。穏やかで清廉に始まる主部と、管弦楽の総奏で哀しみが爆発する中間部が対比される。中間部にドヴォルジャークの過去作「私をひとりにして」という歌曲の旋律が引用されるのだが、若い頃から憧れ続けたヨセフィーナ(妻アンナの姉)が重病だという報せを耳にしたドヴォルジャークの心情が反映されているという。

第3楽章 口短調、ロンド風の自由な形式。短い前奏のあと、チェロが勇ましく奏でるのが主要主題。これが何度もあらわれる間に、異なる性格の音楽が挟まれていく。最終的にこの主題は穏やかな長調に転じて、ゆったりとしたコーダ(結尾部)へ突入。この部分には1895年5月にヨセフィーナが亡くなった後で56小節ほど書き足されており、まるで走馬灯のように第1楽章の第1主題と、第2楽章に引用した「私をひとりにして」が回想されるようになった。

[楽器編成] チェロ独奏、フルート2(ピッコロ持替)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン3、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、トライアングル、弦楽5部。

■ ブラームス：交響曲第1番 ハ短調 op. 68

評価を変えた
2作の存在

先に述べた通り、ヨハネス・ブラームス(1833~97)は出版社から多額の収入を得ていたが、若い頃は違っていた。シューマンの仲立ちで実現した1854年の出版では、6曲あわせて130万円ほどしか収入にならなかった。待遇を変えるきっかけとなったのは、ブラームスが作曲家としての評価を確立したとされる「ドイツ・レクイエム」と、商業的な成功を収めた「ハンガリー舞曲第1~10番」。この2作が1860年代末に出版されてから、彼の作品は高く買われるようになったのである。

作曲、出版の経緯

この交響曲第1番が初演されたのは1876年11月4日だが、少なくとも1854年からブラームスは交響曲を作曲しようと試みていた。そのため完成まで20年以上かかったと解説されることが多いのだが、本作の作曲が実際に進んだのは1862年以降だ。1873年、14年振りに書かれた管弦楽曲「ハイドンの主題による変奏曲」を自分で指揮して初演し、オーケストラの扱いに自信をもったことも後押しになって、完成へと導かれたようだ。1862年から数えても14年もの歳月を要したわけだが、視点を変えてみればそのお陰で最初の交響曲から大金を手にしたといえる。初演後、第2~3楽章を少し改訂してから1877年に楽譜が出版された。

曲の構成と
音楽の特徴

第1楽章 ハ短調、ソナタ形式。荘厳な序奏(イントロ)は、あとに続く本編の素材を予兆のようにほのめかす。ティンパニの一撃とともに音楽が積極的に前に進み出すと主部に突入。短い断片的な旋律を4つ重ね合わせることで、緊迫感のある第1主題を生み出していく。オーボエが主導する穏やかな第2主題も、ヴィオラによる決然とした3つ目の主題も、第1主題の素材を変奏して作られているのがブラームス流のこだわりだ。徐々に緊張感が高まっていく展開部を経て再現部へ。コーダ(結尾)では一旦、長調に落ち着く。

第2楽章 ホ長調、三部形式。優しく心に語りかけてくるような緩徐楽章で、長調なのだがどこか憂いを帯びている。弦楽器の伴奏が同じリズムを繰り返すところからが中間部で、この要素はコーダにも登場する。

第3楽章 変イ長調、三部形式。ベートーヴェンならスケルツォ(諧謔曲)が置かれる場所だが、ブラームスは少し力が抜けた音楽を書くことが好んだ。爽やかな風が吹き抜けていくような主部に対し、中間部では音楽がどんと前へ追い立てられていく。

第4楽章 ハ短調、ソナタ風の自由な形式。序奏が第1楽章と同じハ短調で始まるのは、まるで“寒の戻り”のよう。だが徐々に日差しの暖かさが感じられるようになってゆくと、ヴァイオリンの低い音域によって「ド・シ・ド・ラ・ソ」とはじまる有名な第1主題が聴こえてくる。実はこの主題の骨格となっている「ド・シ・ラ・ソ」が変奏されて、序奏を含むこの楽章全体の主要なメロディが生み出されているのである!(例えば第2主題では、主旋律を支える低弦が「ド・シ・ラ・ソ」を繰り返す)。ブラームスがこの交響曲のなかで最も苦労しただけある見事なフィナーレだ。

[楽器編成] フルード2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦楽5部。